農薬の過剰使用はポルトガルのワイン産業に深刻な打撃を与えかねないとホルヘ・ベーム氏

リスボンの業界イベントで、化学薬剤の反復散布を減らす耐病性ブドウ品種の導入をポルトガルに促した。

2026年11月9日（月）



11月7、8日にリスボン・コングレスセンターで開催された「Essência do Vinho」で、ドイツ人ワイン生産者のホルヘ・ベーム氏は、ブドウ畑で農薬の使用を続ければ、ポルトガルのワイン産業と消費者の双方に悪影響を及ぼす恐れがあると警告した。

「ポルトガルはブドウ畑で農薬の使用を続け、過剰に使用している。このままでは短期的に、国内のワイン産業と消費者にとって惨事となる」とベーム氏は述べた。Planselが11月9日月曜日に発表した声明による。

Quinta da PlanselとViveiros Planselの創業者であるベーム氏は、新著『Livro Branco das Castas Vitícolas』の発表に際してこう語った。同イベントを通じて、耐病性ブドウ品種の導入を加速させるべきだと訴えるとともに、ブドウ栽培における科学的イノベーションに、より開かれた姿勢で臨むよう呼びかけた。

声明によると、ベーム氏は、新しいブドウ品種の導入に抵抗し続ければ、ポルトガルは他のワイン生産国に後れを取るリスクがあると指摘した。また、現地の土壌や気候条件に適さない可能性のある外国品種に依存しないためにも、ポルトガル国内で行われる研究への継続的な支援が必要だと述べた。

声明には、ポルトガルのブドウ畑における農薬使用量の具体的な数値や、ベーム氏が最大のリスク要因と考える化学薬剤・栽培慣行は記されていない。しかし同氏の発言は、ブドウ畑を病害から守り、より高温で不安定な気象への適応を進めながら、化学資材の投入をどう減らすかという、ワイン業界全体の議論に連なるものだ。

ベーム氏の主張の中心にあるのは、病害への抵抗性を高めるよう育種され、化学薬剤の反復散布を減らせるブドウ品種だ。声明の中で同氏は、ポルトガルのブドウ畑とワイン生産の将来を左右する判断において、科学的知見がより大きな役割を果たすべきだと述べた。

本の発表会には、ミュージシャン、ビジュアルアーティストで元大統領候補のマヌエル・ジョアン・ヴィエイラ氏も出席した。同氏は業界の変化の遅さに対するベーム氏の批判に賛同し、ポルトガルのワインは依然として「中世」にあると述べた。Planselによると、ヴィエイラ氏はポルトガルの家庭に「水道ワイン」を届けるという長年の提案も繰り返した。

Planselによると、ベーム氏の主張の基盤となっているのは、同社が長年続けてきたブドウ樹の研究プログラムだ。同社によれば、Viveiros Planselが開発した選抜クローンは現在、ポルトガル国内および海外市場での植栽向けに毎年生産される認証ブドウ苗の約50%を占めている。

同社によると、この研究は数十年にわたり、エヴォラ大学や、現在はポルトガル農業・獣医研究所（INIAV）の一部となっている旧国立農学試験場などの機関と連携して行われてきた。現在は、気候変動や植物衛生上の課題によりよく対応できる植物材料に重点を置いているという。

ベーム氏とポルトガルとの関わりは数十年前にさかのぼる。Planselによると、同氏が初めて同国に到着したのは1961年。セーシェルへ向かう途中で乗っていたヨットがカスカイスに寄港せざるを得なくなり、その後、夜間に漁船と衝突したという。同社によれば、この出来事をきっかけに同氏は一定期間ポルトガルに滞在し、同国とそのブドウ品種の多様性に強い関心を持つようになった。

同社によると、その後ポルトガルに戻ったベーム氏は1970年代にモンテモール・オ・ノーヴォに定住し、ポルトガル品種の研究、選抜、改良に着手した。1981年にViveiros Planselを設立し、研究とクローン選抜のプログラムを開始。この取り組みは、グループの事業と認証ブドウ苗の生産の中核となった。

Planselは、ベーム氏をポルトガルのブドウ品種の研究と普及に最も深く関わってきた人物の一人と評している。同社によると、『Livro Branco das Castas Vitícolas』の刊行を通じて、科学、環境、商業面の圧力によってすでに変化しつつあるブドウ栽培に、ポルトガルのワイン産業がどう対応すべきかについて、幅広い議論を促すことを目指している。